
Before the greatest disaster

腐れ大学生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Before the greatest disaster

【Nコード】

N7468M

【作者名】

腐れ大学生

【あらすじ】

今から丁度十年後、世界が崩壊に見舞われる。世界で最も名高き預言者が、死の瀬戸際に遺した預言である。

この最悪の預言は即座に世界中に伝えられ、主要各国は対策のために大々的な世界会議を開催する。

そして考えられた対策は、冒険者制度という政策を各国にて施行することだった。

b e f o r e t h e d e p a r t u r e (前書き)

三作目となります、腐れ大学生です。

今回は一度やってみたかった正統派ファンタジーをやってみたと思います。

二作目とは平行してやっていこうと思うので、執筆は遅れがちになるかもしれません。

b e f o r e t h e d e p a r t u r e

狭い部屋の中で、一人の老人と一人の少女が円卓を挟んで相對していた。

円卓には奇妙な形状の器具が乱雑に配置されている。また部屋を見ると、壁に沿うようにして棚が設置されており、その全てが錬金術に使うための薬品と鉱石で満たされていた。

「おじいちゃん。」

少女がこの部屋の主と思われる老人に呼びかける。少女の歳の頃は十五前後といったところだろうか、身体は女性として発達してきているものの、未だその瞳には幼さが垣間見える。

長いブロンドヘアを後頭部で一つにまとめており、服装は旅装だろうか、上半身は飛竜製の革鎧、下半身はシルク製のズボンに、同じく飛竜製の革靴を身につけており、その上からローブをまとっている。

背に携えたショートソードは、女性ゆえの非力を考慮したものだろうか。しかしその鞘からは年季が伺え、長年使いこんでいることがわかる。

老人は少女の呼びかけに対して、その厳めしい顔をしかめるだけだった。

老人は黒色のローブをまとい、その白髪は肩まで達している。

白い口髭を胸の高さまで伸ばしたその姿は、まさしく賢者然としていた。

「おじいちゃんが言った、冒険者として身につけておくべきこと

と、学んでおくべきこと、全てこの身に納めました。どうか、旅立ちの許可を。」

少女は老人に無視されたことなど気にせずに、話の続きを紡ぐ。今度の発言は老人にとって無視するわけにはいかないらしく、一度深いため息をついた後、たつぷりと時間を置いてから言葉を返す。

「本当に、行くのか。」

「うん、行く。」

老人の問いかけに対して、少女は寸分の間もおかずに返答する。必要最低限の言葉しか返さないところから、少女の意思の固さが読み取れる。

老人は二度三度と首を横に振るった。この動作の意味は否定ではなく諦観であることを、少女は知っていた。

やがて老人が口を開く。

「わかった、好きにするがいい。十つの頃から言い続けてきたことだ、今更その決意が変わるべくもあるまい。」

少女の顔に華のような笑みが浮かんだ。対して老人はしかめ面をしている。

少女が旅立つことが余程気に入らないらしい。

「ありがとうございます。」

少女は老人に対して素早く背を向ける。これ以上ここにいたら、面倒なことになりかねないからだ。

部屋の出口に向かい、扉に手をかける。

「アリス。」

少女の企みは結局不発に終わる。老人の言葉はアリスの肩に重々しくのしかかってきたので、アリスは振り向かざるを得なかった。

「まだ何か御用でしょうか。」

できるだけ皮肉に聞こえるようにして返答する。まるで厄介者と思われたいかのように。

それに対して老人は一転、先ほどからは想像もつかないほどの柔和な笑みを浮かべて、アリスに言葉をかけた。

「疲れたら、いつでも帰って来なさい。故郷はいつでもお前を迎え入れるぞ。」

アリスは言葉を返すことができず、その場で老人に背を向ける。

ああ、やはり面倒なことになった。これがあるから、早いところこの場を離れたかったのに。

アリスの両の瞳には、真珠のような涙が溜まっていた。

故郷を離れる覚悟は決めていたはずなのに、別れは爽やかにと決めていたはずなのに、結局泣かされてしまった。

背後では老人が優しく微笑むばかりだった。

before the parting

アリスの故郷であるイリト村は、大陸中央から見て東南に位置している。

特産物は麦などの穀物類、観光名所は麦をひくための巨大な風車といった具合で、大陸各所に点在する寂れた農村の典型的なものであった。

五年前、この村にとある政策が施行されたという知らせが届いた。その政策の名は冒険者制度。もともと冒険者という者達は存在していたが、今回の制度はその冒険者達に国からの補助を与えるというものであった。

無論、無条件でというわけではない。

偉大なる予言者が死に際に遺した、七年後に世界が崩壊するという預言。

この原因を突き止めるのに、冒険者を使うつもりなのだ。

冒険者というのは、基本的に一つの街に留まらず、世界中を廻り歩く人種である。

それゆえ、全く原因が予測できない今回の預言を調査させるには、うってつけの人材と言えるだろう。

この政策がイリト村に触れまわられたとき、ほとんどの村人は関心を示さなかった。

こんな辺鄙な村でも先祖代々守ってきた土地があるし、安全に生活できている現在を捨ててまで、危険に飛び込もうと思う者は少なかったからだ。

ただ、一部の若者は違った。この村のあまりの平和さと、世界の狭さに飽き飽きとしていたからだ。

世界の崩壊を防ぐという大義名分ができたなら、家族の反対を押し切るための材料にもなるだろう、そう考えて制度の存在を聞いた

その日から、訓練を始める者もいた。

アリスもその中の一人である。

アリスの家族は村の中でも特に冒険者になることに否定的であり、とりわけ彼女の祖父は激しく反対した。

それでもアリスがしつこく頼みこむと、祖父は条件を提示してきた。

それは、十五歳までに祖父が認める技量を得ること。

祖父の提示した条件の内容は厳しく、剣技、魔法、旅をするのに必要な知識、薬草の知識、魔物の知識など多岐に渡った。

しかしアリスは当時十歳であったにも関わらず、祖父のしごきに耐えた。

彼女は生来頑固な気質であったし、それだけ外の世界を見てみたいという気持ちが強かったのだろう。

そして今日、いよいよアリスは旅立ちの日を迎える。

祖父のもとを去ったアリスは、両親に挨拶をするために実家へと向かっていた。

実家には、両親以外にもアリスと親しくしていた者が集まっていた。

母がアリスを抱きしめ、優しく言葉をかける。

「御父さんからの許可は、もらってきたの？」

「うん、いつでも帰って来いって言われた。」

「これからどうするかは、決めてるの？」

「うん、まずは王都に向かおうと思う。」

「お金は十分に持っているの？」

「うん。」

「必要なものは全部持った？忘れ物はない？」

「うん。」

「本当に、いつでも帰ってきていいのよ。」

「うん、お母さん。」

アリスはそっと母の腕から抜け出した。これ以上腕の中にと、また涙がこぼれてきそうだったから。

「もう、行かなくちゃ。」

振り返ると、父が立っていた。アリスが成長したとはいえ、まだ父の顔は見上げなければ見ることはできない。

父は農具を握りしめてきたせいで、皮膚が硬くなってしまった手で、アリスの頭を撫でた。

平生から寡黙だった父がかけた言葉は、一言だけ。

「がんばってこい、どうせなら有名になってから帰ってこい。」

「うん、ありがとうお父さん。」

アリスは静かに人の輪を抜けると、不意に駆けだした。しばらく走ったところで振り返り、両手を大きく振る。

「みんな、行ってきます。」

跳ねる金髪が、陽光を受けて輝いていた。

b e f o r e t h e g r a s s y p l a i n o f r a n s i e l

イリト村から王都へは熟練した旅人でも四日は歩かなければならない。

旅に慣れていないアリスの足では、最低でも六日は見ておいた方がいいだろう。

途中に物資の補給ができるような街も存在するが、そこまで辿り着くにもアリスの足では二日はかかる。

問題となるのは距離ばかりではない。

イリトは辺境の村であるので、十分に街道が整理されておらず、最寄りの街にたどり着くまでにランシール草原を越えなければならぬのだ。

ランシール草原とは、王都ランシールを中心とした土地のうち、背の高い草が生い茂っている平地を指す。

背の高い、といっても成人の太もも程度の高さであるので、視界が遮られるほどではないのだが、この草原には厄介な生物が住み着いている。

アリスは今まさに、その生物に包囲されつつあった。

姿は見えないが、草をかき分けて駆ける音が四方から聞こえる。

生物の正体はランシールウルフ、ランシール草原を根城とする狼である。

灰緑色の体毛が特徴的なその獣は、狼としてはかなり小型の部類であるものの、その小ささはこの草原では利点となる。

草が彼らの体を覆い隠してしまうので、相手に悟られずして接近することができるのだ。

その体毛の色も手伝って、草が緑色の時期にランシールウルフの接近を感知するは至難の業であるとされている。

他の狼の特性に漏れず、群れで狩りを行うため気付いた時には囲

まれていた、などということも珍しくない。

姿が見えない以上、囲まれた際に頼りになるのは音である。

アリスは草が風にざわめく音に混じって聞こえる、狼たちの足音に耳を澄ませた。

狼たちはしばらくの間、アリスから一定の距離をおいて円状の包囲網を崩さずにいたが、アリスがいつまでも動かないことに焦れたのだろうか、徐々に包囲網を狭めてきたようだ。

狼が動きを見せると、アリスも動く。背に携えたショートソードを抜剣し、呟くようにして魔法の詠唱を始めた。

狼たちも警戒しているのか、未だ襲いかかるそぶりは見せない。

やがてアリスが詠唱を終える。

しかし、その場にこれといった変化は起こらなかった。

アリスは目を閉じて動かない。再び狼の足音に集中しているのだ。やがて先ほどの駆ける音とは明らかに違う、跳躍の音が確かにアリスに耳に届いた。

一頭の狼がアリスの背後から飛びかかってくる。

それに対してアリスはろくに狙いも定めずに、背後を振りむき剣を振るった。

するどい剣閃が風を切る音がした。

しかし相手の位置すら確認せずに振るったその一閃が、野生の狼に当たるはずもない。

剣は空を切り、あわや狼がアリスの首筋に喰らいつかんとしたそのとき、狼は突然強い力に吹き飛ばされて宙を舞い、地面に叩きつけられた。

アリスの剣はかすってすらいなかったはず、吹き飛ばされた狼は、訳もわからぬままに意識を手放したことだろう。

強い力の正体は、爆発的な突風。まるでアリスの剣筋に追従するようにして、局所的な暴風が吹き荒れたのだった。

アリスが詠唱した魔法は、風の元素をその場に顕現させるためのものではなく、自らの武器に留まらせるためのもの。

単純な風魔法を応用し、自らの武器を我流の魔法剣としたのだ。

狼たちは一頭が吹き飛ばされて怖気づいたのだろうか、いつのまにか包囲を解いており、既にその足音は聞こえなくなっている。

アリスが安堵のため息をつこうとしたその時、再び草を揺らす音がした。

まだ残党がいたのか。

アリスは咄嗟に距離を取り、音の聞こえた方へ剣を構える。

アリスの予想に反して、そこにいたのは一人の青年だった。

「ブラボー！」

賞賛の言葉を告げながら、青年は両の手を打つ。

年齢は二十歳前後といったところだろうか、口元に短い髭を蓄えている。

頭には黄色いターバンを巻いており、羽織っているローブも黄色と、全身を同色で統一している。何かこだわりでもあるのだろうか。腰に曲刀を携えており、背には革袋を背負っている。

見た目は冒険者のように思えた。

「素晴らしい！今のは魔法剣でしょう。実際に使っているところを見たのは初めてだ。

君はエヴェリオン出身の人なのかな。」

エヴェリオンとは大陸の極北にある魔法学園都市のことである。都市そのものが魔法学園を中心として形成されており、王室に仕えるほとんどの魔術師はこの学園に在籍していた経歴を持つ。

無論、こんな片田舎にエヴェリオン関係の人物などいるはずがな

い。

先ほど青年が言った、エヴェリオン出身なのか、と問う言葉は、相手の魔法を褒め称えるときの半ば定型文のようなものだ。

アリスはそういった知識も学んでいるので、真面目に返答することなどせず、小さく鼻で笑うだけだった。

剣はまだ納めない。相手が得体のしれない者である限りは、警戒を解いてはいけない。

「そんなに警戒しないで下さいよ。その格好からして、あなたは冒険者さんですかね。」

「未来の、がつくけどね。あなたも同業者なのかな。」

青年はアリスの言葉に一瞬きよとした後、すぐに笑い始めた。まるでアリスの言葉が全くの見当違いであると言うかのように。青年は楽しそうに笑っているが、笑われているアリスは気分のいいものではない。

「何がそんなにおかしいのさ。」

アリスが少し怒ったように言うと、青年はようやく笑うのをやめ、目じりを拭いながら謝意を述べる。

「あはは、すいません。ただ確かに今の私の格好を見ると、冒険者にしか見えないな、と思いましたが。私はあなた方のような勇敢な人達とは全く異なる人種ですよ。この荷物 of 少なさからでは信じていただけないかもしれませんが、私は定めた順路を行き来するだけの行商人ですよ。まだまだ駆け出しですけどね。」

そう言って青年は背の革袋から、一回り小さな革袋を取りだし、

アリスにその中身を見せる。中には袋一杯に塩が詰まっていた。

「ここよりもずっと南東に行ったところに、塩を安く売ってくれる村があるのです。私はそこで仕入れた塩をこれから王都に売りに行こうとしてるんですよ。これっぽっちの量ですけど、買おうと思ったら結構な値段になるんですよ。」

青年は人の好きそうな笑みを浮かべて、聞いてもいないことをダラダラと喋る。

この手の人間は、あまり信頼できる人種ではないが、少なくとも敵意はないらしい。

そう判断したアリスは、ショートソードを鞘に納め、改めて行商人に向き直る。

「それで、その行商人さんが何の用かしら。何か売りつけようと思って寄って来たのなら、あいにくだけど入用のものはないよ。」

「手厳しいなあ。いたいけな少女が狼に襲われていたから、加勢しようと思っただけですよ。」

行商人は頭を掻きながらもっともらしいことを言うが、アリスは彼の目が泳いでいるのを見逃さなかった。

青年はしばらく沈黙を保ち、自らの言い分が通るのを待ったが、アリスの胡散臭いものを見る目についてに折れたのか、本音を漏らした。

「わかりました、本当のことを言いますよ。あなたが狼たち相手に劣勢のようなら、囧にして私は逃げるつもりでした。今こうして近寄ったのは、あなたほど腕の立つ方と一緒になら、安全に王都へ辿りつけると思ったからですよ。」

なぜか怒ったようにして話す行商人。どうやら開き直ったようだ。しかしどうせこれも演技なのだろう。苛立った素振りを見せつつも、その目はこちらの出方を窺うように、ちらりとアリスの様子を伺っている。

アリスは内心呆れていたが、少なくとも先ほどの行商人の言葉に嘘がないことはわかっていた。目的が分かった以上、目の前の相手は信頼はできなくとも、信用はできる相手である。

「別に構わないよ。私も王都に行く予定だったし、一人よりも二人の方が心強い。あなただって、この草原を順路にしているのなら、少しくらいは闘えるんじゃない？」

行商人の顔にはちきれんばかりの笑みが浮かんだ。あなたのその言葉を待ってました、と言わんばかりのその表情に少し不快になったアリスは、青年に釘を刺しておくことにした。

「ただし、あなたが私を見捨てて逃げようとすれば、そのときは容赦なく後ろから切りつけるからね。」

行商人の笑顔が、凍りついた。

before the night

広大な草原を二人の旅人が歩いている。一人は全身を黄色い衣服で統一した青年、もう一方はなめらかな長髪を後方で一つに結んだ少女である。

二人の間には少々距離があった。旅人としての熟練度の差だろうか、青年は涼しい顔をして悠々と歩いているが、少女は青年について行くのがやっと、と言った様子だ。

「ねえ、ちょっと待ってよ。そんなに急がなくていいじゃん。」

少女は疲労をにじませた声で青年に呼びかける。草原に生い茂る背の高い草は足に絡まり、少女の想定していた以上に体力を奪うようだ。

呼びかけられた青年の反応は冷たいものだった。

「我々商人にとって最も大切なのは命、次にお金です。そして時は金成り。商人の足が速いのは、必然なのですよ。それに、あまりあなたの近くにいて切りつけられては敵いませんからね。」

「だからそれはあんたが一人で逃げた場合だってば。大体あんたの方から同行求めてきたくせに、放っていくなんて一体どういう見よー。」

少女が青年の背に抗議の言葉を投げかけると、青年は何か思うことがあったのか、振り返って少女の方へ向かってきた。

「あれ、本当に待ってくれるの。あんた意外といいところあるね。」
「面白くもない冗談はやめてください。そういった意図で近付いたのではありません。」

「それなら剣の錆になりきたの？特殊な御趣味をお持ちなのね。」
「何でその二択なんですか！」

少女にからかわれたのが気に入らなかったのか、青年はじだんだを踏んで抗議の声を上げる。

「だったら何なのさ。もったいぶらずに言いなよ。」

「古今東西、商人が持ちかけることといったら、取引に決まっているでしょう。」

青年の目が商人のそれになる。商人の目は、映る全てを損得で換算する目だ。まだ青年は商人としては駆け出しの身であるが、そのぎらぎらとした眼光は、商売について素人である少女をひるませるくらいの効果はあった。

「な、何さ、入用のものはないって言ったはずだけど。」

「いいえ、あなたは私に待つことを求めているはずです。商人として、需要があるのなら供給すべきですよ。」

「やっぱり待ってくれるんだ？」

「だから違いますよ！いや、違いますけど……。」

「回りくどいなあ。言いたいことははっきり言った方がいいよ？」

「あなたが遮ってるんですよ！いいですか、今のままでは私が望んであなたに同行を求めたようで、気分がよくありません。」

「実際その通りでしょうに。」

「黙ってください。誰が望んでこんな鈍いやつに同行を求めるものですか。」

商人の言葉は耳に痛いものであったが、自分が旅人として未熟なことは百も承知であったので、少女はそのことに関しては文句を言わなかった。

ただわからないのは、一体この青年は何を言いたいのかということ。

少女は青年をちゃかすのをやめ、真意を確かめるようにしてその目を覗き込む。

「ようやく話を聞く気になりましたか。最初から素直にそうしていれば、可愛げもあったものを。あ、すいません嘘です。超可愛いです。マジ絶世の美少女。だからその詠唱やめてください。」

少女は自らの剣に集まりつつあった風の元素を散開させ、剣を鞘にしまう。

祖父からは、実力行使をするタイミングはよく考えろと教えこまれている。今回の判断は、少女としてはかなり満足のいくものであった。

「人一人殺しかけておいて、なんでそんな満足気な顔してるんですか。」

「いや、お爺ちゃんの教えを実践できたから、うれしくてさ。」

「あなたのお爺ちゃんはアサシンか何かですか。もういいです、本題に入りますよ。いいですか、さっきも言いましたが、このままでは私の気分がよくない。あなたのような素人に同行を求めたとあつては、商人の名折れです。ですから、あなたを待つのは構いせんが、条件をつけさせてもらいます。」

「言ってみろ。」

「すごく偉そう！でもいちいち相手はしません。話が進みませんか。条件はただ一つ、あなたが私に、お願いします、一緒に王都まで行って下さい、商人様、と言うことです。」

その場に冷たい風が吹いた。陽光が天から降り注ぎ、草が青々と茂る時期にも関わらず、少女は自身の心が一個の氷塊となるのを感じ

じた。

少女の凍てつく視線が青年を射抜く。

「何ですか、その可哀そうなものを見る目つきは！商人に対して要求を通したいなら、対価を払うのは当たり前でしょう！」

「あなた、よく器が小さいとか、心が狭いとか言われない？」

「そんなことあなたには関係ありません！私が聞いているのは言うか、言わないか、これだけです。さあ、早く決めてください。」

「あなた、器が小さいよね。」

「私が求めているのはその台詞ではありません！」

「どうかお願いします、一緒に王都まで行って下さい、商人様あ。」

「言いよった、こいつ言いよったでえ。それもちよっと色っぽく言い換えてきたでえ。」

「南部の方言が出てるよ。ともかく、これでいいんですよ。」

「ふむ、目的は果たしたものの、何故か敗北感があります。」

「その理由に気づけたとき、あなたは皮剥けるのよ。」

「年下に諭された……。」

広大な草原を二人の旅人が歩いている。一人は何故か肩を落とした青年、一人はそんな青年を励ます少女。

二人は仲良く、連れ立って歩く。

ランシール草原を、夜の帳が覆った。空は曇っているらしく、星々の光の加護は期待できそうにない。辺りはねばつく闇で満たされていた。

アリスは周辺の草をなぎ倒して、野営の準備をしていた。やはりアリスの足では、草原を一日で踏破することはできなかったらしい。近くには青年の姿もある。荷物からランプを取りだして、炎魔法により火を灯そうとしているようだ。

しかし、青年がランプに灯をともすことは叶わなかった。

詠唱が終わる直前に、アリスにランプを取り上げられたのだ。
青年は抗議の声をあげる。

「何するんですか、魔力を空消費してしまったではないですか。」
「何してるんだはこっちの台詞よ。こんな星明かりもない夜にランプをつけるなんて、自殺行為もいいところよ。」

青年はあつけにとられた。アリスの言葉の意味が分からないのだ。
アリスは青年の様子を見て、心底呆れたように言う。

「本当に知らないのね。確かに火を灯せば獣避けにはなるかもしれないけど、人はそれを目印にして寄ってくるよ。」

そこまで言われて、やっと青年にも合点が言った。

「それは、夜盗の類が寄ってくるということですか。」

「そうよ、こんなことも知らないで、あなたよく今まで生きてこれたね。」

「普段は野営などしませんからね。いつもの私なら、こんな草原とつくに踏破して、今頃は街のベッドの中です。しかし悲しいかな、今回は重い上にやかましいお荷物が……。」

アリスは青年の脛を蹴った。青年は無言で脛を押さえ、アリスの足元を転がりまわるが、アリスは気にせず野営の準備を続ける。

「アリスさん。」

「何。」

「思ったのですが、火がないと夜盗は寄ってこなくても、獣は寄ってくるんじゃないですか？」

アリスは無言で荷物から香炉のようなものを取りだすと、青年に投げつけた。青年は咄嗟に受け取ると、値踏みをするようにして香炉を見る。下膨れの壺のような形状をしており、上部には香煙を発生するための窓がいくつか備えられている。

「何ですか、これは。売っても二束三文だと思いますよ。」

「獣が嫌がる臭いを調合した香だよ。いくらで買って下さるのかしら。」

「御冗談を、早速焚きますよ。」

青年は今度こそ炎魔法の詠唱を完了させる。赤く、小さな火炎が指先から放たれ、香炉を一瞬だけ明るく照らす。うまく香料に着火できたらしく、青年の鼻を微かな香りが刺激した。

「思ったほど臭いはいしませんね。こんなので本当に効果があるんですか。」

「獣は人間なんかよりずっと鼻が利くからね、それで充分だと思うよ。」

アリスはローブを体に巻きつけるようにして寝転がった。もう眠るつもりなのだろう。

青年もそれに習って、香炉を二人の間におくと、なぎ倒された草の上に横になった。

「言っとくけど、変なことしたら容赦しないからね。」

「わかってますよ、私だって命は惜しいですからね。」

静寂が夜の草原を包み込む。そこに存在する音は、唯一風が草を風で通り抜ける音だけだ。無限に続くかとも思われる無明の闇は、人間の一人くらい飲み込んでしまってもおかしくない。

「ところでアリスさん、どうしても聞いておきたいことがあるのですが。」

「何さ。明日は早いんだから、手短に済ませてよ。」

「昼間の話なのですが、アリスさんは旅人としては確かに未熟です。」

「喧嘩売ってんの？」

「違いますよ、話は最後まで聞いてください。ただ昼間の狼との立ち回りや、野営の手際の良さを見ると、あなたは十分にこの平原を一人で越えられるだけの力を持っているように思えます。」

「だから何なの？」

「私が聞きたいのは、何故私の下らない要求に応えたのかということ。あなた一人でも問題ないのなら、あそこで私を引き止める必要はなかったでしょう。」

青年の問いに対して、アリスは答えなかった。代わりに聞こえてきたのは、堪えるような忍び笑い。アリスが何故笑いだしたのか理解できず、青年は狼狽した。

「どうして笑うのですか。私、何か面白いこと言いましたか？」

「いや、やっぱり商人なんだなって思ってたさ。たまには損得だけじゃなくて、もっとシンプルに物事を見てみなよ。」

「単純なことと言うと、情報が欲しかったのですか、それとも物資が不足していたとか？」

「どれもはずれ。」

青年は頭を抱えてしまう。思い浮かぶことは出尽くした。これ以上の答えなど、本当に思いつかない。

「降参です、一体何故なんですか？」

「一人より、二人の方が楽しいからに決まってるじゃん。」

その答えを聞いたとき、青年はもはや乾いた笑いを上げることしかできなかった。闇に遮られて見えないが、たぶん少女は、はにかんだ笑みを浮かべていることだろう。

自分はなんて馬鹿なことでも悩んでいたのだろう。若いころから鍛え上げてきた自慢の商人の目は、こんな単純明快なことでもわからなくなるほどに曇ってしまっていたのか。

「あのととき感じた敗北感の理由、今少しだけわかった気がします。」
「一皮剥けたね、青年。」

無限に続くかとも思われる無明の闇。一人なら飲み込まれそうでも、二人ならば何のことはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7468m/>

Before the greatest disaster

2010年10月9日00時50分発行